

湿原の保全、復元に全力投球する

釧路管内・浜中町 認定 NPO 法人霧多布湿原ナショナルトラスト

春、一斉に芽吹いたヨシ、スゲの若葉を背景に白いミツガシワ、赤紫色のヒオウギアヤメ、カキツバタなどが次々と咲き乱れる。前後して白い綿帽子を被ったワタスゲの大群落^{ワタスゲ}が湿原を圧倒、続いて黄橙色のエゾカンゾウが全面を覆い尽くす。

中央を蛇行して流れるメイン河川・琵琶瀬川のほとりには、エサを啄むタンチョウの親子や水鳥の群れが見え隠れ。

やがてススキが主役にとって替わると、濃紫のエゾリンドウやトルコキキョウが秋色に彩りを添え、セピア色になったヨシ原が、夕日に一瞬、ハッと息をのむ金色の輝きを見せたあと白一色の冬へ突入する。

ここは釧路・浜中町の中央部に広がる霧多布湿原。国内最大級の湿原の原生花園で、花の多さ、美しさから「花の湿原」とも呼ばれ、国内はもとより世界にも類を見ない希有で貴重な存在だ。

だがその周辺は、大半が民有地で、一部はすでにコンブ干場^{かんぼ}や宅地化されて湿原に侵入、さらにいつ、どんな形で花園を浸食してくるかわからない不安を抱えている。

これを保存し、浜中の、いや地球の財産としてそっくり後世に残そうと頑張っているのが、民有地を買い取り、いずれは復元しようと突き進む「霧多布湿原ナショナルトラスト」だ。かけがえのない貴重な自然

と、トラストの意義が理解されるにつれ、賛同の輪は着実に広がっており、一方、保全活動で花の色、数、群落の広がりは一時よりぐんと素晴らしくなったと云われ、運動に携わる人々に勇気と希望を与えている。



緑一色に広がる霧多布湿原。蛇行して流れる河川の光の反射が目まぶしい

■保全のきっかけ 観光客のひとこと

霧多布湿原は南北に 9 km、東西に 4 km 西側の河岸段丘と東側の海岸線に囲まれたおよそ 3100ha の広がり。泥炭の進み具合で高層、中層、低層の 3 エリアから形成され、とくに丘陵寄りの中央部 850ha の高層部は、大正 11 年（1922 年）に「泥炭地形成植物群落」として国の天然記念物に指定され、早くから貴重な湿原として評価されていた。1993 年（平成 5 年）にはラムサール条約に登録され、その後北海道遺産にも選定されている。

だがこの湿原、地元の人たちにとってはひところまで、美しい花は見せてくれるも

の、立ち入るとずぶずぶ埋まり、畠にも宅地にもならない、いわゆる“無用の長物”といった認識で、保全しようなど考える人はほとんどいなかった。

それが一転、「貴重な自然だから守らなければ」の動きになったのは、今から30年ほど前の1983年（昭和58年）、この地に観光に訪れた東京の会社員夫妻のひと言だった。

夫妻は目の当たりにした花の大群落に強く感動。当時、町内に一軒しかなかった喫茶店に立ち寄り、美しさを絶賛。同時に周辺から進んでいた開発の波に「このままでは湿原は失われてしまう」と、警鐘を鳴らした。

当時湿原は、周辺の私有地がコンブ干場やそれを運ぶ馬の放牧場、または草地などに使われ、時には平気でゴミを捨てる人もいて回りからじわじわと浸食され、破壊の危機が迫っていた。

この話を聞いたのは、当時この店の経営を任されていた現ナショナルトラスト理事長の三膳時子さん（52）、客の同副理事長・瓜田勝也さんら20～30代の若者たち。「湿原はそんなにすばらしいものなのか……」。若者たちは半信半疑ながら、半ば遊び心で仲間7人で「湿原に惚れた会」を作り、一緒に湿原を巡った。交流はそれから3年ほど続き、その中で若者たちは湿原の貴重さ、大切さに次第に目覚めていった。その頃、時代は自然保護の考え方が高まり、7人も「惚れただけでは駄目だ。守らなくては」と思いを募らせ1986年（昭和61年）、「湿原ファンクラブ」と名を変え、湿原の守り手となった。

■ ファンクラブからNPOトラストへ

その後のクラブの活動は目覚ましかった。まず医師会長ら町の名士をファンに巻き込むと、すかさず全国に湿原のすばらしさをPR、同時に会員募集をスタートさせた。

並行して周辺の私有地所有者宅を一軒ずつ回り、湿原保全のために土地を貸してほしい旨をお願いした。守るためには周辺の私有地の確保が是非ものと考えての行動。この頃クラブには資金が無く、会員も少なかったので、まず借地して保全し、「いずれ町にでも買い上げてもらえば」といった程度の気持ちだった。幸い10軒ほどから30haの承諾が得られて借地。ここを中心に観察用木道づくりや小公園の造成整備などの保全活動に入っていった。

一方、町もこの活動をバックアップ。1993年（平成5年）には湿原の西方高台に、エリアの調査、研究、観光などを担う「湿原センター」を建設。広報や観光、教育などの立場で大きな役割を果たし、その機能は一層充実して今も続いている。

私有地の借用活動はその後も続き、借地は順調に増えていった。そんな折、地権者の一人から「どうせ使わないから買い上げてもらえないか」と、思ってもみない申し出が。丁度この頃、クラブの支援団体からまとまった寄付があったので、相談のうえこれを買上げた。この時点で「いずれ町にでも買ってもらえば」の思考は消え、「自分たちの力で何とかしよう」の信念に変わった。PRの効果で湿原を知る人はぐんと増え、ファンも日を追って増加していった。

その頃、自然保護やまちづくりの手法として米国で行われていたNPO（非営利団体）制度が我が国でも採り入れられることになり、クラブは湿原を守るにはこのやり方が効果的と判断。同時に民有地を一般から募った資金で買い取るトラスト方式を導入することにし、2000年（平成12年）1月、「ファンクラブ」を解散し「霧多布湿原トラスト（現在の名はナショナルトラスト）」を発足させた。NPO法人のリーダーは、米国では大半が女性というので、浜中で生まれ育ち、主婦ながら当初から保全活動に関わってきた三膳さんが全員に推されて初代理事長になった。

■ 民有地購入順調 保全にまい進

トラストのキャッチフレーズは“この湿原を子どもたちへ”。この目的達成のために「保全する」、「ファンを増やす」、「再生する」の3本柱を掲げ、活動は一段と活発化した。

まず周辺民有地の不在所有者全員に手紙を出し、湿原を守るために土地を買い上げる用意があることを通知。それに応えて承諾の返事が続々と届き、中には「いらぬから寄付する」の嬉しい申し出も。これらの土地は、それまでに蓄積した寄付や助成金で次々と買い取った。さらに、2004年（平成16年）に、寄付をするとその分、税控除を受けられる「認定NPO法人」に道の第1号として認定されると、現金や遺贈の形で数百万円から千万単位の大型寄付も寄せられ、買い取りは極めて順調。2015年末までに、トラストが確保した民有地は大小65区画、約840haと、周辺民有地全1200haの70%に

も。とくに湿原への浸食が著しかった海岸側の大半を確保したほか、湿原にとっては最も大切な水源上流部の森林地おおどころの大所も手に入れた。とはいえ、これで湿原破壊の危険は去ったとは云い難く、スタッフは一層、気持ちを引き締めている。

この間組織は、海岸道路沿いの湿原のほとりに「湿原トラストインフォメーションセンター」を建てて保全活動の拠点とし、いつでも誰でも出入りして湿原について知り、学び、遊べるようにした。

また子供や地域の人たちに、湿原をよりよく知ってもらおうと教育や教宣活動も活発に展開。学校の授業や子供自然クラブを通じて実地見学会や学習会を頻繁に開催し、大人には湿原内の清掃や木道の設置、補修に参加してもらい、地元にある“宝物”への関心を高めてもらっている。



湿原学習の一環で、夜、周辺森林にネズミの生態調査に出かける子供自然クラブ員たち

さらに湿原についてもっと深く知ろうと、2、3年続けて、湿原研究では国内第一人者だった故・辻井達一北大教授ら専門家を招いて勉強会を開催。この結果、湿原は単に美しいだけではなく、貯水性、稚魚のゆりかご、多くの動植物の生命誕生・維持、地場産業のコンブや魚介類育成のためのきれいな水やプランクトンの供給など、

地元の暮らしにとってもかけがえのない存在でもあることを学んでいった。これがまた民有地買い上げの有力情報にもなっている。



広大に広がる秋の湿原を前に、未来を語る三膳理事長

こうした一連の活動がマスコミなどで知られるにつれ会員申し込みは個人、企業から続々届き、現地見学やツアーで訪れる人も格段に増えた。その人たちがまた口コミなどでファンを増やす、という形で輪が広がり、これまでに札幌、東京、博多、そして鹿児島までファンクラブが結成され、2015年末現在、会員数は2200人、法人116団体、ほかに活動支援、事業助成、寄付企業などが数十あり、外国人も含めてファンはなお増え続けている。

復元については2年ほど前に着手したばかり。最初に買い取った民有地から古い建物を撤去、分厚く敷かれていた土石を取り除いた後、穴を掘りむき出した泥炭層からどんな植物が生えてくるかの実験からスタート。1年後、1カ所の穴から小さな柳が芽生えたが、成長はきわめて遅く、現在観察中。次いでコンブの干場だった土地から砂利を剥ぎ取り、スゲの株や周辺の植物数種を移植し、育成するのは何かを見極めるテスト中だ。いずれも北大・北方植物園の

教授の手で進められているが、何しろ湿原自体、数千年もかかって生成されたものだけに復元は極めて長い年月がかかり、次世代以降、長く継続しなければならない課題となっている。

これら一連の事業を支える運営資金は会員の会費、寄付、協賛助成金、それに自分たちで得た湿原センターの委託管理代、環境教育代など合わせて2014年度で8,300万円あまり。これで運営全般を賅っているが、今後の土地購入のための蓄積も少々あり、財政的な苦勞がさほどないのが幸い。スタッフは理事長以下9人だが、2,300余人の会員全員が応援団と、三膳理事長は屈託がない。

トラストについて同理事長は「これまでこられたのは人と人の繋がりの方が大きく、心から感謝しています。責任者として土地を購入して保全し、復元できるまでになった事がとても嬉しい。湿原はきれいだ。そこに人がかかわって本当の美しさが保てると思う。自然と生活が共存し、美しい自然の中でゆったり過ごせる価値にみんなが気づき、大勢の人に見に来てもらえればいいな——そんな思いでこれからも湿原をしっかりと守ってゆきたいと思います」ときっぱり。

■ 連絡先

〒088-1531 厚岸郡浜中町仲の浜 122
認定NPO法人
霧多布湿原ナショナルトラスト
理事長 三膳 時子 (さんぜん ときこ)
TEL 0153-62-4600
FAX 0153-62-4700
Email : sanzen@ kiritappu.or.jp
URL : <http://www.kiritappu.or.jp/>